

# 届け 世界の果てまでも

令和3年 3月16日

No. 72

文責 校長 飯久保一男

## チームとして

書き出すと、書きたいことがたくさん出てきてしまい、とって文字の多い通信になってしまいました…。

コロナ禍での開催をどうするかという大きな課題がありますが「東京オリンピック」が開催される年です。今号は、前大会「リオデジャネイロオリンピック」の日本チームの活躍から、チームで取り組むよさについて書いてみます。

私が一番感動した試合は、バドミントンダブルスの「タカマツ」ペアの決勝戦です。劣勢からの大逆転に、テレビの前で夜中に1人で騒いでいました。高校からペアを組んでいるという先輩と後輩の関係で、性格も対照的だということですが、長年、チームとして積み重ねた努力の結果の金メダルだと感じました。その2人の言葉です。

**実力的には世界一ではないのですが、2人の連係は世界一だと思っています。だから、どんな状況でも、自分たちの力を出せば負けられない自信がありました。**



陸上競技の中でチームとして戦うのはリレーです。100m×4リレー400m R男子の日本代表の4選手は、個人種目では誰も決勝へ進出できませんでしたが、その4人が日本独特のアンダーハンドパスを磨き、銀メダルを獲得しました。ポルト選手率いるジャマイカにはかないませんが、世界1位の力をもつアメリカを押さえ2位になったことに大きな価値があると思います。第3走者の桐生祥秀選手言葉です。

**日本のバトンパスが最高だということは結果で証明できた。**



女子のバスケットチームの活躍にも興奮しました。世界ランク16位の日本は、金メダルを取った世界ランク1位のアメリカに敗れ、ベスト8で終わりましたが、背の小さい日本チームが、豊富な運動量と速いパス回しで、世界の強豪にも勝てることを示してくれました。

予選リーグの相手は全て格上でしたが、世界ランク10位のベラルーシ、7位のブラジル、4位のフランス（前大会銀メダル）を破り、世界ランク2位のオーストラリアをああと一歩のところまで追い詰めました。決勝トーナメント初戦のアメリカ戦は高さで圧倒されましたが前半は互角に戦いました。組織力を軸に走り勝つ日本女子バスケットチームは世界から賞賛されたのです。キャプテンの吉田亜沙美選手言葉です。

**走るバスケットで、小さいチームでも世界で戦っていけると証明できた。**



これらのチームは、実力は相手が上でも、チームとして戦えば勝つことができるということを証明してくれています。個人個人の力は、かなわなくても、チームとして戦うことで結果を出すことができたのです。

学校においては、友達、学級、学年、児童会など、様々なグループや集団で、学習や活動に取り組むことで、関わりやつながり、協力や団結などを学びます。長縄跳びの「小笠原チャレンジ」「きずなエイトマン」では、うまく跳べない子にタイミングを知らせる声をかけたり、チームで競い合ったり、自分たちがやっていないときは、同じクラスのもう1つのチームを応援したりという姿が見られました。学年の取り組みは、最近では、6年生を送る会へ向けての動画づくりに取り組みました。児童会の取り組みの縦割りの活動からも、多くのことが学べたと思います。オンラインでの学習の話が話題になりますが、小学校においては、同じ空間・同じ場所で、同じ時間に関わり合いながら学ぶことも大切であり、必要でもあります。

そして、グループや集団の中で、1人ではできないこと、自分の力だけではできないことが、仲間と取り組むことによって実現できることを実感することが、学校において集団で学ぶ意味でもあります。

教職員も同じです。本校では、学校教育目標の実現を目指し、同じ教育方針をもち、組織として、チームとして、取り組んでいます。教職員が各自の力を発揮し、また、補い合ってきています。もちろん、授業をはじめ、1人でやらなければならないことは多くありますが、その授業の構想は相談できますし、先輩教職員から指導を受けることもできます。

本校の教職員は、子どもたちのトラブルなどにもていねいに対応し、保護者の皆さんの理解も得ています。教職員が1人で抱え込まないよう組織として取り組んでいます。また、私や教頭への報告・連絡・相談を欠くことのないようにも伝えていきますので、様々な対応の前後で必ず教職員からの相談や報告があります。その内容からすると、保護者の皆さんに納得してもらえたという形で終わっているものばかりです。

そして、学校が組織として、チームとして機能していくためには、保護者の皆さん・地域の皆さんのご理解とご協力が欠かせません。それぞれのポジション＝学校が担わなければならないもの、家庭や地域で担っていただきたいものなどについて、この紙面で書かせてもらっていますが、

「子ども・保護者・地域・学校」が1つのチームとして「**チーム小笠原小**」をつくって取り組むこと

が大きな成果につながります。

バスケバカのしつこい話になりますがお許しください

### ＜女子バスケットオリンピックこぼれ話 その1 予選リーグ最終戦 (vs フランス)＞

バスケットでは残り時間が少なく僅差で負けているときに「ファールゲーム」を仕掛けることがあります。相手に時間稼ぎをさせない戦法です。24秒以内にシュートを打たなければいけないというルールがありますが、逆に考えると、相手は24秒間ボールを持ってられるルールです。負けていて残り時間がないのに、相手に24秒もボールを回されると試合が終わってしまいますので、わざとファールをして、相手に2ショットを打たせて、そのリバウンドを取り、自分たちの攻めの時間を増やしていくのがファールゲームです。相手が2ショットを決めれば2点取られるわけですので、ある意味、イチかバチかの賭けの戦法です。



リオ五輪の女子バスケットの予選リーグは、最終戦で日本がフランスに勝てば、フランス・トルコ・日本の3チームが3勝2敗で並び、決勝トーナメント進出が決まる状況でした。日本はフランスに13点差以上で勝てばリーグ3位、15点差以上つければリーグ2位となり、決勝トーナメントの初戦でアメリカと当たらない状況で、フランスに勝っても13点以下であった場合は、リーグ4位となり、もう一つのリーグをダントツ1位で勝ち上がったアメリカと準々決勝で当たってしまう状況でした。アメリカはダントツの世界ランク1位、金メダル間違いなしのチームでした。アメリカと当たらなければ、メダルの可能性があります。アメリカと当たれば大会が終わってしまう可能性が大でしたので、フランスに13点以上つけて勝つ必要があったのです。

フランス戦の終盤、リードしているのは日本でした。そのまま終われば、フランスに勝つという快挙を成し遂げられるのですが、何と日本はリードをしているのにファールゲーム（逆ファールゲーム）を仕掛けているのです。つまり、13点差をつけるために、負けも覚悟してファールゲームを仕掛けたのでした。結局、前大会銀メダルのフランスには勝ったものの、あと5点届きませんでした。フランスを破る快挙でしたが、チームにとっては悔しい勝ちになったのでした。

さらにバスケバカのしつこい話が続きます

### ＜女子バスケットオリンピックこぼれ話 その2 決勝トーナメント1回戦＝準々決勝 (vs アメリカ)＞

そして、アメリカ戦です。前半を10点差で終える大善戦を日本は見せました。圧倒的な力の差があるにもかかわらず、後半開始早々、アメリカの203cmの怪物センター、グライナー選手が165cmの吉田選手のシュートをブロックし、大声を上げて喜びました。一気に点差をつけられたときも、アメリカのヘッドコーチが豪快なガッツポーズをしていました。なぜ、世界王者のアメリカが、余裕で勝てる日本を相手に、ここまで興奮し、全力で戦ったのでしょうか。アメリカのマコトリ選手は、この試合がもつ特別な意味をこう言いました。



コートの中から端まで走り回る日本を追いかけるのは本当に大変。

でも、私たちはこういう試合を求めている。

現在の世界の女子バスケットは、NBAの選手でメンバーを固める男子以上に、アメリカの「超1強」の時代です。アメリカと対戦する相手は最初から勝負を捨て、経験を積ませる試合にあてるチームもあります。そういう相手には、アメリカもベストメンバーを組み合わせません。そんな中で一番背の小さな国が女王を恐れず、自分たちの強みを真っ向からぶつけ、前半だけとはいえ接戦をしたのです。アメリカは、日本のようなエネルギーに満ちた手応えある相手との戦いを待ち望んでいたのです。結局は、それがアメリカの闘争心に火をつけ、本気のぶつかり合いとなり、当たって砕けた結果、日本は64-110という大差で敗れたのでした。しかし、本気になったアメリカを相手に、前半だけでも走り回って対抗できたのは日本だけだったのでした。